

ロシアと CIS 諸国の日本語教師が持つ 音声指導への意識

小熊利江（ルーヴァン・カトリック大学/開智国際大学）
rie.oguma@uclouvain.be

【要約】

本研究では、ロシアと CIS 諸国で日本語を教える教師に対してアンケートを行い、音声指導への意識について調査した。教師を日本語母語話者と非母語話者に分けて回答を分析した結果、両者に異なる特徴が見られた。日本語母語話者教師は現地の大学で主に発音指導を担当しているが、発音指導は難しいと感じていることがわかった。その一方で、非母語話者教師は口頭能力の習得を重視し、発音指導が必要だと考えていることが明らかになった。日本語の音声習得に関するセミナーで新しい指導法を学んだ後、非母語話者教師には自らも発音指導を実践してみたいという意欲が表れた。

1. はじめに

旧ソビエト連邦から独立した CIS 諸国には、現在 9 か国の加盟国があり、1 か国が準加盟である。ロシアや CIS 諸国の一部では古くから日本語教育が行われているが、伝統的な学問分野である文法や翻訳等が重視され、口頭能力に関する指導があまり行われていないことが報告されている（仲矢・稲垣 2005, 藪崎 2007, マシニナ 2009, 小熊 2021, 他）。ただ、近年のロシアの日本語教育では、アニメの理解や口頭コミュニケーション能力の習得を求める学習者のニーズが高まり、それに応えようとする教師が徐々に増えているという報告もある（ストリジャック・大田 2016）。地域によって状況は様々に異なると思われるが、これまでロシアや CIS 諸国の日本語の音声指導については研究や報告が行われておらず、入手可能な情報がほとんどない状態である。

筆者は、ロシア CIS 日本語教師会の年次大会¹において、第二言語としての日本語の音声習得および音声指導に関するセミナーを実施する機会を得た。ロシア CIS 日本語教師会は 1991 年に設立された、域内で最も大きい日本語教育関係の組織である。国際交流基金モスクワ日本文化センターの支援を受けて、研究発表や実践報告を行う年次大会、ワークショップやセミナー、日本語弁論大会などを定期的で開催している。モスクワで開催される年次大会には、ロシア全土および CIS 諸国から多くの日本語教育関係者が集まる。筆者は年次大会でセミナーを行った後に、参加者に対してアンケート調査を行った。本研究では、その調査結果をもとに、ロシアと CIS 諸国における日本語の音声指導に関する教師の意識について最近の状況を報告する。

2020 年からのコロナ禍、さらに 2022 年からの戦争により、現在ロシアに研究目的で渡航することは

¹ ロシア CIS 日本語教師会の年次大会の使用言語は主にロシア語であるが、日本語での発表も受け入れられている。

難しい。本アンケート調査の結果は、最近のロシアと CIS 諸国の日本語教育の状況を知る上で貴重な資料になると考えられる。

2. 研究の目的と方法

本研究は、これまでまとまった調査や報告がなされていないロシアと CIS 諸国における日本語の音声指導に関して、現場の教師の意識について報告することを目的とする。研究の方法として、当該地域にて日本語教育を行う教師にアンケート調査を実施し、その結果を量的および質的に分析する。具体的な調査方法については、以下に詳しく述べる。

3. 調査の概要

筆者は、ロシア CIS 日本語教師会の年次大会において、第二言語としての日本語の音声習得と音声指導に関するセミナーを行った。セミナーの参加者は 50-60 人程であった。セミナーの後で、参加者に日本語の音声指導に関するアンケート用紙を配布し、調査への協力を依頼した。アンケート調査の概要は以下の通りである。調査への回答数はセミナー参加者の約半数ほどであった。

3.1 日本語音声指導に関するアンケート調査の実施

時期： 2018 年 10 月
場所： モスクワ市内
対象： ロシアや CIS 諸国で日本語を教える教師
回答数： 26 人

3.2 アンケート調査の回答者

アンケート調査に参加した教師 26 人のうち日本語母語話者は 7 人、日本語非母語話者は 19 人であった。日本語母語話者 7 人は全て日露青年交流センターによる日本語教師派遣事業の参加者であった。派遣期間は通常 2 年間である。一方、日本語非母語話者 19 人は、それぞれの国の現地語の母語話者であるが、ロシア語も堪能である。日本語を教えている国と人数の内訳は、ロシア 13 人、キルギス人 4 人、トルクメニスタン 2 人、ウズベキスタン 1 人、タジキスタン 1 人、カザフスタン 1 人、記入なし 4 人であった。また、日本語を教えている機関としては、大学 20 人、初中等公立学校² 2 人、語学学校 3 人、記入なし 1 人であった。

3.3 アンケート調査の質問内容

アンケートの内容は、ロシアと CIS 諸国の日本語教師の音声指導への意識をさぐる目的で設問した。セミナー後にアンケート用紙を配布し、回答者に文中の空欄にあてはまる言葉を考えて記入するよう口頭で指示した。回答欄には複数の言葉を記入してもよいことにした。日本語非母語話者であっても設問の意味が理解できるように、質問には回答例が示してある。質問紙には以下のように記されている。

² ロシアの学校教育制度では、初等教育と中等教育が 11 年間の一貫教育として行われ、学校は初中等一貫校となっている。

下線にあてはまる言葉を書いてください。ご自由にお書きください。たくさん書いてもかまいません。

① 発音の指導が/は _____。

(回答例：好きです/きらいです/かんたんです/むずかしいです/おもしろいです/できます/できません/必要です/必要ないです/めんどろです/上手です/下手です/やりたいです/やりたくないです/・・・)

② なぜなら、_____からです。

感想やコメントがありましたら、お書きください。

4. 調査の結果

4.1 アンケート調査の結果〈日本語母語話者7人〉

まず、日本語母語話者である教師7人の回答を見ていく。回答者は日露青年交流センターによってロシアや CIS 諸国に派遣され、現地の大学に所属している。日本語を教えている国と人数はロシア4人、キルギス1人、記入なし2人であった。

アンケートの質問①は、提示された文を完成するタスクである。「発音の指導が/は_____。」という文中の下線部の空欄に自分の考えを記入するよう指示された。質問①の回答の結果を、図1のグラフに示す。図1を見てわかるように、全ての回答のうち最も多く記された言葉は、「むずかしいです」(86%)であった。ロシアと CIS 諸国で日本語を教えている母語話者教師7人中6人が、発音の指導を難しいと感じていることが明らかになった。回答欄に、「むずかしいです、おもしろいです」や「難しいですが、おもしろいですし、結果が目に見える(耳に聞こえる)ので、やりがいがあります」など複数の言葉を書いているものも見られた。

質問②では、質問①で記入した回答について、理由を述べるよう指示されている。質問②の文は「なぜなら_____からです。」となっており、下線部の空欄に回答①の理由を記入することになる。質問①に「むずかしいです」と記入した回答者は6人いたが、その理由として「担当の授業は全て発音指導だ」、「きちんと発音指導を勉強したことがなく、自信がない」、「日本人なので無意識で発音していることが多く、指導するのは難しい」などが挙げられていた。また、「自分自身も学びになる」、「学

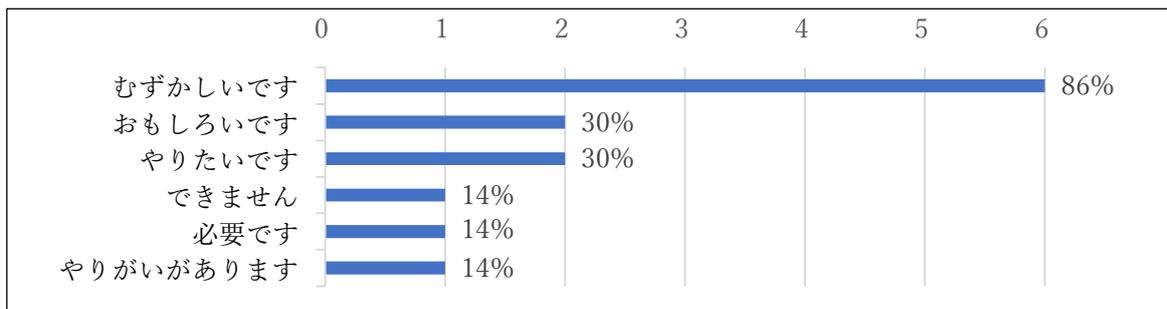


図1「①発音の指導が/は_____。」の下線部に入る言葉(日本語母語話者):横軸は人数

生のニーズに応えることができる」、「発音の指導は聴解の向上にもつながる」とも記されていた。その他、「文法等教えなければならないことが多く、時間が取れないんですが、少しずつ時々したい」という記述も見られた。

4.2 アンケート調査の結果〈日本語非母語話者 19人〉

次に、自身がかつて学習者であった日本語非母語話者の教師 19 人の回答を見ていく。日本語を教えている国と人数の内訳は、ロシア 9 人、キルギス 3 人、トルクメニスタン 2 人、ウズベキスタン 1 人、カザフスタン 1 人、タジキスタン 1 人、記入なし 2 人であった。また、日本語を教えている機関は、大学 13 人、初中等公立学校 2 人、語学学校 3 人、記入なし 1 人であった。

質問①「発音の指導が/は_____。」という文中の下線部の空欄に自分の考えを記入する設問に対する日本語非母語話者の回答の結果を、図 2 のグラフに示す。最も多かった回答は、19 人中 14 人が書いた「必要です」(74%) であった。次に、半数以上の教師によって記された言葉としては、「おもしろいです」(58%) と「やりたいです」(58%) が挙げられる。日本語母語話者に多かった「むずかしいです」という回答は 6 人が記し、全体の 32% であった。また、「おもしろいです、必要です」、「むずかしくても、必要です」など、1 人で複数の言葉を書いている回答もあった。

質問②では、自身の回答の理由を「なぜなら_____からです。」という文中の下線部の空欄に記すよう指示されている。その結果、質問①で最も多く表れた言葉「必要です」に対する理由は、「きれいで正しい発音は相互理解に通じる」、「正しい発音しなかったら、通じなくなる」、「ほんとうに先生方にも学生たちにも必要だと思います。もし発音に良くちゅういしないと困るかもしれません」、「自然発音を身に付けるべき」、「発音はただしかつたら、自然的なスピーチができる」、「発音がかいれいな人が上手に聞こえる」などと記されていた³。

また、質問①において次に多かった回答「おもしろいです」と「やりたいです」の理由は、「今日まで教え方の方法があまり知らなかつた」、「むずかしいです。やりたいです。自分で(指導を)⁴うまく

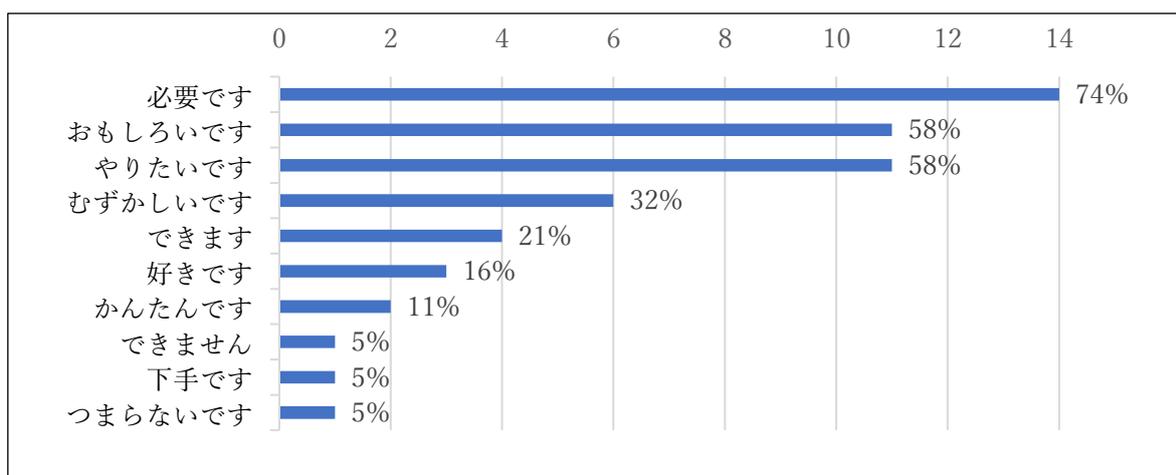


図 2 「①発音の指導が/は_____。」の下線部に入る言葉 (日本語非母語話者): 横軸は人数

³ アンケート用紙に記されていた言葉は、原文のまま本稿に記した。

⁴ 文脈を省略しても意味がわかるように、筆者が () 内の言葉を加筆した。

できるようになりたい」などであった。そして、「日本語を学習する学生に大事です」、「発音は大事」(2人)、「とても必要」、「発音はいちばん必要なんだ」、「発音はいちばんだと思います。そして必要」などとも記されていた。

5. 結果の分析と考察

5.1 日本語母語話者の日本語教師が持つ音声指導への意識

アンケートの回答結果から、まず日本語母語話者である教師の音声指導への意識をさぐっていく。質問①の回答として、多くの母語話者教師が発音指導は「難しいです」と記した。その理由として、「きちんと発音指導を勉強したことがなく、自信がない」、「日本人なので無意識で発音していることが多く、指導するのは難しい」などと書かれていた。日本語母語話者であるため第一言語として自然習得した日本語の音声、および発音指導の方法について学んだことがない教師が多いという状況が見えてきた。

しかも、「担当の授業は全て発音指導だ」という記述に見られるように、外国で日本語を教える場合、母語話者教師は発音のモデルを示すこと、さらに発音を指導することが期待され、発音や会話の指導担当になることが多い現状が改めて明らかになった。「自分自身も学びになる」という言葉のように、母語話者教師が日本語音声について自身も学びながら、学習者の指導に取り組んでいる様子が見えてくる。その原因として、日本での日本語教師養成コース等で発音や会話の指導方法について学ぶ機会が少ないことが考えられる。現代の学習者のニーズは著しく変化し、日本語を聞いて理解したり上手に話したりしたいという要望が増えている。日本語教師養成コースの学習内容も、それに対応できるよう変化させていく必要があるのではないだろうか。

仲矢・稲垣(2005)によるロシアと CIS 諸国の日本語教師に対する調査では、現地の日本語教師の不得意分野として「アクセント・イントネーション」の指導が第1位に挙げられている。第2位は「表記(漢字)」であったが、第3位には再び「音声」が不得意分野として挙げられている。ロシアと CIS 諸国の非母語話者教師は自身の発音に自信がないため、日本語母語話者に学習者への音声指導を期待している様子が見えてくる。しかし、母語話者であっても日本語音声について学んだ経験がなければ指導が難しいというミスマッチが起きているようだ。

非母語話者教師と異なり、母語話者教師には発音指導が「必要です」(14%)という回答は少なかったが、発音指導を行うことで「学生のニーズに応えることができる」、「発音の指導は聴解の向上にもつながる」と述べ、口頭コミュニケーション能力を身に付けたいという学習者のニーズは把握している。発音指導の必要性や利点も認識しており、積極的な意識を持って発音指導を行っていることが明らかになった。しかしながら、「文法等教えなければならないことが多く、時間が取れないんですが、少しずつ時々したい」という記述からわかるように、授業内で発音指導の時間を取るのが難しい教師もいるようである。ロシアや CIS 諸国で多く使用されているロシア語で書かれた教科書が文法シラバスであるという事情も影響しているかもしれない。

5.2 日本語非母語話者の日本語教師が持つ音声指導への意識

次に、日本語非母語話者の教師の回答を分析する。質問①に対して、発音の指導は「必要です」という回答が74%と最も多かったことから、近年ロシアと CIS 諸国の日本語教育においても、口頭での

コミュニケーション能力が重視されるようになったことが確認された。発音指導が必要だと考える理由として、「正しい発音しなかったら、通じなくなる」、「きれいで正しい発音は相互理解に通じる」、「ほんとうに先生方にも学生たちにも必要だと思います。もし発音に良くちゅういしないと困るかもしれません」など、正しく発音できないと相手に理解されないので困るという内容が記されていた。発音が悪ければ、コミュニケーション自体が成り立たないと考えている教師が多いことが明らかになった。

また、「自然発音を身に付けるべき」、「発音はただしなかったら、自然的なスピーチができる」、「発音がきれいな人が上手に聞こえる」など、自然な発音で話すことにより日本語が上手に聞こえるという効果も理由として記されていた。これらの記述は、上手に話せるようになりたいという学習者たちの願望とそれを実現させようとする教師の姿勢が反映されたものだと考えられる。

その他、発音指導が必要な理由として、「日本語を学習する学生に大事です」、「発音は大事」(2人)、「とても必要」、「発音はいちばん必要なんだ」、「発音はいちばんだと思います。そして必要」なども記されていた。このように非母語話者教師の回答には、発音指導は大事で必要だということが多く記されていた。

質問①の回答として2番目に多かったのは「おもしろいです」(58%)と「やりたいです」(58%)であり、母語話者教師の回答に多かった「むずかしいです」(32%)を上回った。その理由は、「今日まで教え方の方法があまり知らなかった」、「むずかしいです。やりたいです。自分で(指導を)うまくできるようになりたい」などと記され、多くの非母語話者教師は発音指導の方法を知らなかったが、日本語の音声習得と音声指導に関するセミナー受講後に、学んだ方法を実際に試したいという意欲が表れたことがうかがわれる。元学習者である非母語話者教師は、学習者にとっての困難点があるため指導を行う上で有利である。しかし、発音が上手にできないので、自分には指導できないと考え母語話者に指導を任せていたようである。セミナー受講後には、発音指導はおもしろそう、やってみたい、うまくできるようになりたい、と意識が変化したことが考えられる。他方、母語話者教師は、発音指導を既に担当し苦心しているため、「おもしろい」や「やりたい」などの回答が少なかったと考えられる。

これらの回答から、普段この地域では発音指導に関する情報に触れる機会が少ない状況が見て取れる。ロシアや CIS 諸国では、年次大会でも音声指導に関する研究発表はほとんど見られない。この地域では日本語の発音指導のための教材が少なく、日本で出版された教材は現地の教師には入手が難しい。ソビエト連邦時代は日本人と直に話すことが少なく、学習内容は読み書きの習得が優先され、文法や語彙、翻訳や文献講読に重点が置かれていた。ソビエト連邦崩壊後もそのような状態が続いていたようで、その頃に日本語を学んだ非母語話者教師は発音や口頭能力を学ぶ機会があまりなかった可能性がある。

最後に、2つの回答を紹介する。質問①に対して、発音指導は「むずかしいです」という回答の理由として、「せいとたちのねんれいは8さいから17さいまで。てきとうなきょうかしよがありません」と書かれているものがあつた。これは初中等教育段階で日本語を教えている教師の回答であり、年少者向けの適切な発音教材がないと述べている。また別の回答では、発音指導は「必要ですが、つまらないです」と記されていた。その理由は、「ちょっとたいくつで、練習のタイプも少ない」からだとして述べられていた。発音指導が必要だと考える非母語話者の教師が多い一方で、日本語の発音学習の方法にはバラエティーが少なく退屈だと考える教師もいることがわかった。これらのことから、日本語の音声指導のための教材や練習方法が幅広く開発されていないことは、日本語教育界における課題であ

ると言えよう。

6. おわりに

ロシア CIS 日本語教師会の年次大会において、第二言語としての日本語の音声習得と音声指導に関するセミナーを行った後にアンケートを実施し、同地域で日本語を教える教師の音声指導への意識について調査した。日本語母語話者の教師と非母語話者の教師とに分けて回答を分析した結果、日本語の音声指導に関して、それぞれに特徴的な回答が見られた。日本語母語話者では、発音指導は「むずかしい」と感じている教師が 86%と非常に多いことが明らかになった。その理由として、日本語の音声や発音指導の仕方を学んだことがないからだと言われていた。また、日本語母語話者教師は、話し方や発音が上手になりたいという学習者のニーズを把握し、それに応えたいという意欲を持って発音指導に取り組んでいる様子が見えられた。さらに、外国で日本語を教える際には、母語話者教師は発音指導を担当することが期待されている状況も改めて認められた。

一方、日本語非母語話者の教師の回答では、発音指導は「必要です」という意見が 74%と最も多い結果であった。その理由として、正しく発音しないと通じなくて困ることや、自然な発音で話すとうまく聞こえることなどが挙げられていた。非母語話者教師は、日本語学習において口頭能力を重視し、自然な発音を学ぶことの重要性を強く認識している様子が見られた。また、半数以上の非母語話者教師が回答した意見として、発音指導は「おもしろいです」と「やりたいです」が挙げられる。多くの非母語話者教師は、それまで発音の教え方を知らなかったが、セミナーで学んだ発音指導法はおもしろそうだと感じ、学んだ方法を実践してみたいという前向きな姿勢が見られた。セミナーの受講が、非母語話者教師の発音指導への意欲を高めた様子が見えられた。ロシアと CIS 諸国では音声指導に関する知識や情報に触れる機会が少ない状況が見られた。日本語の発音指導のための教材や練習方法が幅広く開発されることが望まれる。

参考文献

- 小熊利江 (2019a) 「ロシア人大学生による日本語の音声習得状況—日本語レベルと発音の不自然さ—」『BATJ ジャーナル』 20, 英国日本語教育学会, 72-76.
- 小熊利江 (2019b) 「日本語の発音の習得と指導の可能性」 *Японский язык в вузе: актуальные проблемы преподавания 18* (『高等教育における日本語—教育の実際的な諸問題—18』) (共著) ロシア CIS 日本語教師会編, モスクワ: Ключ-С, pp115-128.
- 小熊利江 (2021) 「ロシア人による日本語発音の不自然さの傾向—単音レベルの発音に着目して—」『日本語教育連絡会議論文集』 33, 日本語教育連絡会議, 119-126.
- 小熊利江 (2023) 「ロシア人の日本語の母音産出に関する探索的研究—モスクワにおける縦断的観察からの質的分析—」『日本語教育連絡会議論文集』 35, 日本語教育連絡会議, 47-56.
- 国際交流基金「東欧 日本語教師会・日本語教育関連学会一覧」
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/gakkai/g_e_europe.html> (2024年3月20日)
- ストリジャック, ウリヤナ・大田美紀 (2016) 「ロシアにおける日本語教育パラダイムシフトへの挑戦

—モスクワ高等教育機関を例に—」『第20回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集』ヨーロッパ日本語教師会, 214-219.

仲矢信介・稲垣滋子 (2005) 「ロシア・NIS 諸国への日本語教育支援再考」『日本語教育』127, 51-60.
マシニナ, アナスタシア (2009) 「ロシアの高等教育機関における日本語教育—極東国立人文大学における日本語教育の実情と問題点—」『外国語教育研究センター紀要外国語教育フォーラム』3, 金沢大学外国語教育センター, 64-74.

薮崎義雄 (2006) 「ロシアにおける日本語教育の現状と問題点」『創価大学大学院紀要』28, 創価大学, 149-172.